

豊岡市におけるコロナ禍でのコウノトリ学習の実施状況と課題

*本田裕子¹

A report on a survey on the status and issues of stork learning in the corona pandemic at Toyooka City

* Yuko Honda¹

¹ Department of Public Policy, Faculty of Socio-Symbiosis, Taisho University, 3-20-1 Nishi-sugamo, Toshima-ku, Tokyo 170-8470, Japan

*E-mail: yukohonda2013@gmail.com

背景・目的

兵庫県豊岡市では2005年からコウノトリの野生復帰の取り組みが展開されていることもあり、「コウノトリとの共生」をまちづくりの柱の一つとし、2017年度からは小学校3年生から中学校3年生にかけて豊岡市について学ぶ上での3テーマ（コウノトリ、産業・文化、ジオパーク）を「総合的な学習の時間」で学んでいく市独自の教育カリキュラムである「ふるさと教育」が導入されている。本報告では、小学校3年生および5年生で取り組むことが定められたコウノトリ学習の中の、5年生を対象にした学習状況に着目する。

なお、豊岡市の「ふるさと教育」については、その副読本（『豊岡ふるさと学習ガイドブック』）の作成状況について整理を行い（本田 2017）、さらに市内の29校ある小学校を対象に主にアンケート調査を実施し、2017年度の実施状況および教育効果（本田 2019a, 2019b）および2017年度から2019年度までの教育効果（本田 2022）について報告している。これらの調査結果を整理すると、「コウノトリについて学ぶ」文脈から知識や理解に関する学習効果が得られていることがわかった。一方で、コウノトリ学習を「ふるさと教育」が企図する地域学習として深化させるには一定の課題があることもわかった。そして、コウノトリ学習をESD（「持続可能な開発のための教育」¹⁾の略称）や地域学習として深化させていくには、「コウノトリとの共生」を探求することを前面に

出すことが必要であり、そのためには学校や教員へのサポートがさらに必要との考察を行った。

2020年初頭から現在まで続く新型コロナウイルス（COVID-19）の感染拡大は、小学校、中学校等を含めて教育機関に多大な影響を与えている²⁾。現場見学を主とする環境学習ではその影響を受けていること（花嶋 2022）、オンライン学習ツアーでの学習効果（佐竹ほか 2022）が報告されているが、コロナ禍が続いていることから、その状況は十分把握されていない。2017年度から実施されてきたコウノトリ学習もコロナ禍により何らかの影響を受け、今後しばらくその影響が続くことを前提とし、コロナ禍にどのように対応して、コウノトリ学習を実施しているのかを把握する必要があると考えた。また、2017年度の導入に合わせて作成された副読本（『豊岡ふるさと学習ガイドブック』）のコロナ禍での利用状況や課題についても把握したい。

以上をふまえて、本報告では、「ふるさと教育」のコウノトリ学習がコロナ禍での影響にどのように対応し、学習を展開しているのかについて把握することを目的とする。併せて、副読本の発行から数年が経過している現段階で学校側がコウノトリの野生復帰に関する新たな情報をどのように入手し、それをこどもたちにどのように教えているのかについても把握する。

方法

2017年度から2019年度の調査期間では29校あった小学校が統合により2022年度時点で25校となっている。その25校の中から、筆者が2017年度から2019年度に調査を行った際に、授業見学や担当教員・児童へのインタビュー調査経験のある8校を対象とした。8校には豊岡市こども教育課およびコウノトリ共生課の協力を得て、学校名および教員名を非公表とすることで調査の受諾が叶った。

2022年度もコロナ禍は続いているため、学校への訪問を避け、電話あるいはオンラインミーティングツールであるzoomを使い、インタビュー調査を行った。インタビュー対象者は、2020年度から2022年度に5年生の担当経験のある教員を学校側で選定いただいた。

¹ 大正大学社会共生学部公共政策学科
170-8470 東京都豊島区西巣鴨3-20-1

*E-mail: yukohonda2013@gmail.com

以下、調査日、対象小学校（A校からH校）、担当教員の5年生担当となる。質問項目は、2020年度と2021年度の Kouノトリ学習の時間数、実施内容、コロナ禍による影響、学習を展開する上での課題となり、インタビュー時間は各校30分から1時間程度となる。

2022年8月18日：

A校（電話、2020年度・2021年度に5年生担当）

2022年8月22日：

B校（電話、2022年度に5年生担当。前任者からの引き継ぎの内容を質問）

2022年8月23日：

C校（電話、2020年度・2021年度・2022年度に5年生担当）

D校（zoom、2021年度に5年生担当。総合学習を複数年担当されていた教員も同席）

E校（電話、2021年度に5年生担当）

F校（電話、2022年度に5年生担当。前任者からの引き継ぎの内容を質問）

G校（zoom、2020年度と2022年度に5年生担当）

H校（電話、2021年度と2022年度に5年生担当）

なお前述の通り、学校名や教員名を公表しないことが調査の条件であるため、学校が特定される可能性を避けるため8校の具体的な特徴は記載しない。ただし、8校全体でいえば、小規模校が多く、過小規模校および適正規模校はそれぞれ含まれているが、大規模校は含まれていない。また、2005年の豊岡市合併前の旧1市5町の地理的偏りもない。

また、これらのインタビュー調査をふまえて、2022年12月26日に豊岡市こども教育課に電話にて状況確認も行った。

結果

1. Kouノトリ学習の実施状況

インタビュー結果から、Kouノトリ学習の実施概要を項目ごとに整理した。ここでの学習の実施状況は2020年度と2021年度の状況を整理したものとなる。

1-1) 実施状況の概要

コロナ前に実施した調査から、Kouノトリ学習は2学期中心であることを確認していたが（本田 2019a, 2022）、コロナ禍でも従来同様に2学期中心であることが確認できた。ただし、8校のうち1校では、自然学校の行事が従来予定されていた1学期ではなく2学期になった年

度があり、その年度ではKouノトリ学習は1学期に実施していた。また、1学期～3学期の1年間をかけて実施した学校も1校あった。

学習時間数については、標準時間数は15校時であるが、コロナ前の平均時間数は2017年度から2019年度の3年度ともに22校時であったが、今回も8校の平均となるが22校時であった。多い学校で35校時、少ない学校で14校時であった。

コロナ禍による影響については、例えば校外学習ができず、代わりに校外学習で行く予定であった施設の職員にゲストティーチャーとして来てもらったり、保護者向けの学習発表会ができなかったりした学校もあったが、コロナが原因での欠席児童への特別な対応はなかったとのことであった。そもそも2020年度と2021年度はコロナが原因での欠席児童はほとんどおらず、欠席児童がいた学校でも、1人1台授業内で使っているタブレットを自宅まで届けた上で、算数、国語や「朝の会」の時間にオンラインで接続することはあったそうであるが、Kouノトリ学習ではそのような対応はしなかったとのことである。

8校ともに、前任教員からの引き継ぎが、口頭や資料であることに加えて、後述するが教育委員会のサーバー内にあるExcelにて他校の取り組みの概要を知ることができたそうである。

Kouノトリ学習の流れについては8校ともに調べ学習が基本であり、副読本や前述の1人1台のタブレットを用いて調べ学習を行い、全体やグループ内での共有を経て、個々人が新聞形式やスライド形式で発表を行う、というものであった。コロナ前、例えば筆者が2017年度に授業見学を含め調査した際にはグループ単位で模造紙やスライドを用いて発表を行っていたが、個々人で成果物を残す形式となっていた。これは、豊岡市では5年ほど前から児童の学習成果を1人1人ポートフォリオとして残すことになっており、個々人の成果物の方がわかりやすい、という背景に加えて、後述するが、1人1台ICT機器（以降タブレットと記載する）を利用していることも背景にある。

1-2) 調べ学習について

前述の通り、Kouノトリ学習は調べ学習が主であり、副読本やタブレットを用いて情報を収集していた。コロナ前の調査でもタブレットはあったが、インターネット環境に不具合があり、副読本を多用している、ということを確認していたが（本田 2019b）、今回の調査の結果、インターネット環境が改善され、タブレットを用いて情

報を収集していることがわかった。インターネット環境の改善では、全員がインターネットに接続してもおおむね可能になったという話を伺えた。ただ、一部の学校では、情報検索は問題なく行えても、例えばオンラインで交流するとなると、タイムラグが生じたり、音が途切れたりすることもあるそうである。

タブレットの操作については、3年生や4年生では操作に不慣れな子もいるが、5年生になると操作はスムーズとのことであった。タブレットで使ったアプリは、Google (Classroom, Workplace, Meet, Slides), Microsoft (PowerPoint), Keynote, Jamboardが挙げられていた。学校によっては、多くのアプリを活用していることもわかった。

また、タブレットでは情報検索・収集だけでなく、撮影・画面保存を行い、個人での成果物に活用していることもわかった。副読本の内容も撮影し、保存を行っているとのことで、コロナ前に副読本が授業のたびに配布し回収する貸与型であることを不便に感じる教員もいたが（本田 2019b）、今回のインタビューでは8校の教員全員が貸与型であることに問題を感じていなかった。

副読本は、「ふるさと教育」の3つのテーマである、コウノトリ、産業・文化、ジオパークの3部構成であり、コウノトリの部分は5章構成に加え、資料として野外個体一覧表やコウノトリに関する年表が添付されている。1章『『コウノトリ』を知る』では生態や野生復帰までの歴史について、2章「世界基準で進むコウノトリ野生復帰」では県立コウノトリの郷公園および県立大学大学院の研究やラムサール条約登録湿地等の野生復帰の取り組みの現状について、3章「共感の広がり」では企業やボランティアの活動や寄付金について、4章「全国へ、そして」では千葉県野田市や福井県越前市等の他自治体や韓国の取り組みについて、5章「未来へ・・・」では県立コウノトリの郷公園初代研究部長の故池田啓氏の文章が記載されている。

このように副読本を通じてコウノトリの野生復帰に関する歴史や取り組みを知ることができる一方で、副読本が2017年に発行されたものであるため、野生復帰の取り組みに関する最新情報については、タブレットを使い情報収集することになるが、8校の中には最新情報を扱わずに、副読本の記載を中心に調べ学習をさせている学校も複数あった。その理由としては、インターネットでの情報が子ども向けではないものが多いこと、教員もコウノトリの野生復帰の取り組みに詳しくないこと、子どもたちから質問が挙がる内容、例えば海外や他自治体の取

り組みについての情報がわからないことが挙げられていた。また、5年生のコウノトリ学習テーマである「共に生きる」についても、そもそも「共生」とは何かを含めて、こどもにわかりにくく、「野生生物との共生」についての情報も不足しているという話が伺えた。

1-3) ゲストティーチャーについて

2020年度にはゲストティーチャーを呼ばなかった学校は1校あったが、2021年度は8校ともゲストティーチャーを呼んでいた。8校が依頼したゲストティーチャーは、機関・部署としては、県立コウノトリの郷公園、豊岡市コウノトリ共生課職員、豊岡市農林水産課職員、JAたじま米穀課職員、但馬県民局豊岡土木事務所職員、関西電力職員であった。また、コウノトリの野生復帰に直接関係する施設・部署もあれば、「コウノトリ育む農法」に関係する部署もある。また、市民団体の「日本コウノトリの会」スタッフに依頼した学校もあった。

1-4) 校外学習について

校外学習を実施したのは1校のみであり、場所は県立コウノトリの郷公園であった。多くの学校で校外学習を実施しなかった背景には、コロナ禍であること、前後の授業を考えると時間的余裕がないこと、バス代の費用がかかること、安全面に課題があること（徒歩での移動は歩道が狭く交通事故の危険がある等）が挙げられていた。また、コロナ前に校外学習で行っていたが、コロナ禍以降は校外学習を行わず、代わりに校外学習で行っていた施設の職員をゲストティーチャーとして呼んでいる学校もあった。

コロナ前でも校外学習にはバス代の費用がかかるといった課題がありながらも、野生復帰に関係する施設を訪問することで子どもたちの学習意欲も変化すると肯定的に捉える教員がいたが、今回の調査では、校外学習で最新情報を補足できると肯定的に捉える教員がいる一方で、3年生で県立コウノトリの郷公園の訪問、6年生ではジオパークを学習するので市内のジオサイトの見学、という計画がすでにあるため、5年生で校外学習を必要と考えていない教員も複数いた。

1-5) コウノトリ学習の意義

コウノトリ学習は冒頭で述べたように3年生と5年生で学習する。3年生では「コウノトリを知る」として、主にコウノトリの生態について学び、5年生では「コウノトリと共に生きる」として、野生復帰の取り組みについて学ぶ。コウノトリ学習が導入された2017年度では、当時の5年生は3年生の時にコウノトリ学習を受けていないため、5年生での学習では、コウノトリの生態について

も学んでいた (本田 2019b)。2020年度や2021年度の5年生は、3年生の時に学んできており、また5年生になった時でも3年生での学習内容を覚えているため、5年生のコウノトリ学習はスムーズに入るとのことであった。

教員へのインタビュー調査では、コウノトリ学習を実施した際の子どもたちの反応について話を伺った。まず、子どもは「米づくりのことを知らない」という反応である。豊岡市内には多くの水田があり、校区内に水田があり祖父母が米づくりをしているとしても実際の米づくりについては知らない子どもが多い、とのことであった。コウノトリ学習では「コウノトリ育む農法」についても学習するので、それでお米が作られるプロセスを初めて知ることが多く、そのためコウノトリ学習によって米づくりを理解する機会となっていることが伺える。

次に、「コウノトリは日常的な存在のため、歴史を学ぶと絶滅したことについて『えっ、そうなの』と驚く」という反応である。そもそもコウノトリの放鳥は2005年9月に最初に実施され、現在市内では野外にいるコウノトリを多く目撃することができる。5年生でいえば、幼少の頃からコウノトリは野外で多く見かける存在のため、「普通にいる」という認識となり、コウノトリ学習を通じて、かつて日本で野生下では絶滅していたという事実に驚く、とのことであった。

コウノトリ学習を含めた「ふるさと教育」の意義について、教員からは、「×× (学校のある地区名) の子が『玄武洞』を知っているのはすごいこと。自分が子どもの頃ではないこと」という発言もあった。「ふるさと教育」では、コウノトリだけではなく、他の学年で産業・文化やジオパークについて学ぶことになっている。ジオパークの学習では、市内にある「玄武洞」について学ぶ。玄武洞は合併前の旧豊岡市内にあり、合併前の旧町に住んでいる子どもが「玄武洞」を知っていることは、教員自身の5年生当時を振り返ればなかった、という認識である。

そして、「5年生なので豊岡は暑いとか、都会がいいとかという考えがあると思うが、豊岡市の自慢は何かと聞いたらきっといろいろ言うと思う。そういう場所に住んでいるという、うれしさや意識は自然に持っているような気がする。それを再確認するための『ふるさと教育』だ」という発言から、「ふるさと教育」そのものが豊岡市内のさまざまな地域資源を理解することができるものになっていることが伺える。

また、「大人も含めて、地元民が知らないことが多い。例えば『コウノトリ育むお米』が沖縄や海外で売られて

いること。そういった情報発信を豊岡市がもっとしたほうがいい」という発言からは、コウノトリ学習を通じて教員も野生復帰の取り組みを詳しく知る機会にもなっていることがわかる。

2. 学習を展開する上での課題

学習を展開していく上での課題についても話を伺えた。具体的には情報提供を必要とする意見であり、どのような情報を必要としているのか、インタビュー調査で得られた発言をふまえて、以下に整理する。

2-1) ゲストティーチャーに関する情報提供

多くの学校でゲストティーチャーの情報を必要としていることがわかった。自校だけではなく、「他の学校ではゲストティーチャーの情報が不足しているという話も聞いたことがある」という発言も見られた。副読本やインターネットで記載のない情報について、ゲストティーチャーにその役割を期待する、例えば「共生とか未来の豊岡市とかに関しての情報が少ない。副読本にもあまり書かれていないので、そういうのに詳しいゲストティーチャーやその情報があるといい」という発言もあった。そして、ゲストティーチャーの候補者が一覧となったものを望む声が多かった。具体的な発言としては、「ゲストティーチャーは引き継ぎで、選択肢がない状態。ゲストティーチャーの一覧があるといい」、「教員も異動があるので、校区内のことがわからない。そのためゲストティーチャーの情報が一覧であると心強い」、「各校でテーマや狙いが違うので、ゲストティーチャーは人材バンクというか一覧があると助かる」があった。

2-2) 学習内容に関する情報提供

学習内容についての情報を求める発言としては、「教員が子どもの時にコウノトリがいなかったので、わからない部分がどうしても出てくる」や「教師が事前にいいページ (サイト) を知っておくこと。あとこのページ (サイト) を見ておけばいい情報や、教師向けの冊子が市の方からあればありがたい」といった発言が見られた。

野生復帰の取り組みについての最新情報を求める発言としては、「最新情報の入ったガイドブックがPDFになってタブレットに入っていると便利」や「最新情報は紙でいただいて使うほうがいい。サイトはURLで欲しい。それをClassroomに載せることができる。豊岡市としておすすめの、子どもたちにも見せてほしいというサイトの一覧があればありがたい」、「最新情報があるならそれに越したことはない。5年も前の情報となると、子どもたちにとってはピンとこない。2020年だと最近の認識は

あるが、2016年や2017年となると他人ごとに捉えがち、ウェブ上でもらう形で問題ない」があった。

背景としては、タブレットの情報検索が便利である一方で、1-2)でも述べたが、こどもでも理解できるサイトや情報が不足していることがわかった。発言としては、「タブレットで最新情報を調べても、こどももよくわからない、教員もそこまで追いつかない」、「『コウノトリ』で検索するとたくさん出てきて、どのサイトに行けばいいのかわからない。サイトをみても、こどもたちには漢字が読めなかったり難しすぎる内容であったりする」、「タブレットで調べても意味がわからない、言葉がわからない、となる。やっぱり副読本になる。どのサイトにいけばいいのか、調べたいことがそのサイトのどこに載っているのか難しい。わかりやすいサイトへの誘導が欲しい」、「ネットの情報も、例えば現在の生息数もサイトで数字が違ったりする。またネットの情報も漢字が多く、大人向けでこどもにはわかりにくい。またサイトも生態に関するものが多い」があった。

また、コウノトリや野生復帰に関する情報以外の情報を求める発言もあり、「こどもの主体に合わせた、いろいろな環境問題の資料が欲しい。例えば『温暖化』という1つのテーマではなく、さまざまなテーマの環境問題を扱ったもの」、「共生を学ぶ上で、どのサイトを見たらいいか情報があるといい。共に生きるという、人にとってもコウノトリにとってもよいまちづくりについての豊岡市の取り組みについて調べられたらいい」、「未来の豊岡市を考えることが難しい。情報量が少ない。共生もイメージしにくい。こどもたちのレベルではなかなか出てこない」といった、こどもが理解のできる、環境問題や「共生」に関する情報が必要とされていた。

2-3) 他校の取り組みを含めて情報共有

前述のような情報提供だけではなく、他校での取り組みを知りたいという発言も聞かれた。教育委員会のサーバーには、学習課題、探求的な学習活動をするために行った工夫、ICT機器の活用、体験活動やお世話になったゲストティーチャー、児童の様子や手応え等といった項目のExcelが置かれており、各校の教員はそれに自由記述で入力し、その内容が共有され、他校の状況を知ることができる状況にある。その一方で、記述が簡潔に書かれている場合もあり、より具体的な取り組みを知りたいという発言、例えば「他校のものが知れたら新しい視点は出てくると思う」、「校内での引き継いだ情報だけでは広がりがないことも。新しいことを開拓するにも時間がかかるので他校の情報が知りたい」があった。その解決

の一つとして、「他校との交流というか情報共有があれば、例えば公開授業、総合学習のコウノトリ学習部分」、「夏休みに5年生の担任向けのコウノトリ学習の研修会や共生についての学習会があれば、2学期にコウノトリ学習をされるところが多いと思うので見通しを持ったり、各校の先生たちと交流する機会にもなる」という、公開授業や研修会・学習会を挙げる声もあったが、時間的余裕がないこともあり、「研修会よりも資料提供、人材情報の提供の方がいい」という声が複数挙がっていた。

考察

2020年度、2021年度はコロナ禍であったが、コウノトリ学習はおおむね予定通り実施できているということがわかった。インターネット環境の改善も進み、タブレットを使い、情報検索はもちろん、副読本の撮影や情報の保存もでき、また個人の成果物としてスライドを作成するといった学習を展開することができていた。つまりコロナ前の、副読本を使い調べ学習を行い、模造紙等で学習をまとめるという状況から変化が見られた。

タブレットの利用がコロナ前の調査時より浸透していた背景にはGIGAスクール構想³⁾がある。これは2019年12月に文部科学省が発表した教育改革の取り組みであり、1人1台の学習用端末、インターネット環境の整備を行い、教育ICTの実現を目指すものである。この構想と、2020年初頭から始まるコロナ禍でのオンラインツールの充実の両者が相まって、コウノトリ学習でもタブレットの活用が進んだということになる。

また副読本については、コロナ前に実施した調査では貸与型ではなく配布型を求める意見や最新情報への更新を求める意見もあったが(本田 2019b)、今回の調査では副読本自体に更新を求める意見は見られなかった。

一方で、調べ学習をする上で、教員側が適切な情報提供を求めているということがコロナ前の調査同様、今回の調査でも確認できた。具体的には、ゲストティーチャーの情報(個人情報関係で一覧の提供が難しい場合は相談可能な窓口の情報)、最新情報を含めたコウノトリの野生復帰に関する児童にもわかりやすい情報(サイトの情報含む)、5年生の学習テーマである「共生」に関する児童にわかりやすい情報(サイトの情報含む)が挙げられる。現状では、副読本に書かれている情報に依存することが多く、副読本の教材としての利用価値はあるものの、2017年発行とすでに年数が経過しており、最新情報の更新は必要であるといえる。ただ、この点に関して、

こども教育課に口頭で確認したところ、副読本の改訂は現時点で計画されていないとのことであり、そのため最新情報は別の方法で学校側に提供する必要があると考えられる。

調査の結果、ゲストティーチャーの情報や最新情報を含めた学習内容の提供を求める発言が多かった。その背景として、教員自身がコウノトリの野生復帰についての知識が十分でない可能性があり、また教員を含めた豊岡市民がコウノトリの野生復帰の取り組みについて十分な情報を持ち得ていない、という状況にあることも考えられる。筆者は2006年から定期的に豊岡市民を対象にアンケート調査を実施してきているが、野生復帰の取り組みをすべて豊岡市が税金で行っていると誤解している回答もあること、またコウノトリの野生復帰のための環境教育や啓発活動の対象を問う質問結果では「豊岡市内のこども（小学生～高校生）」よりも「豊岡市民全体」が最も多く選ばれてきていることを受けて、豊岡市民への情報発信および「知る・学ぶ」機会の拡充が必要であると提起していたが（本田 2021）、今回の調査によっても、その必要性は高いといえる。

なお、一部の教員からは公開授業や研修会・学習会等の機会提供を望む発言もあったが、昨今の教員の働き方改革の動向をふまれば学校全体としては研修会等の減少という傾向もあり、実現可能性は低いと考えられる。今回の調査結果から得られた課題の解決には、コウノトリの野生復帰の推進を担う県立コウノトリの郷公園や豊岡市コウノトリ共生課が主体になる等して、こどもにもわかりやすい情報の発信、および、大人にも最新情報の発信を積極的にしていけるような体制や組織づくりに取り組むことがまず必要といえる。5年生のコウノトリ学習では「共に生きる」という社会的な学びをすることになっている。ここでの理解をこどもだけでなく、担当する教員側に深めてもらうためにも、情報提供を含めて学校側への手厚い積極的なサポートが重要である。

コウノトリの野生復帰を継続して推進していく上で、住民の理解と協力を醸成していく意識啓発は必要不可欠であり、特に豊岡市内の小中学生を対象にした「ふるさと教育」のコウノトリ学習は、野生復帰に理解と協力のある次世代の市民を育成する上で大変重要な取り組みである。こどもたちの学習状況および学校や担当教員の要望をふまえて発展していくことを期待したい。

なお今回の調査から、「共生」（自然・野生生物との共生）に関する一般的かつ利用可能な学習教材も不足していることが把握できた。筆者はこれまで「コウノトリと

の共生」について住民のコウノトリの捉え方を通じて調査研究を行ってきたことから、その延長で「共生」についての情報発信をすることは筆者自身も取り組んでいきたいと考えている。それを目指して教材開発や実践の充実につなげて研究を発展させていくことは今後の課題となる。

注

- 1) 阿部 (2012) によると、環境教育、開発教育、人権教育、平和教育、民主主義教育といった持続可能な社会の形成にかかわるあらゆる教育課題が連携・融合したものとされる。
- 2) 2020年には全国の小学校、中学校、高等学校および特別支援学校等で休校となった期間もあった。文部科学省「全国一斉臨時休業関係（2/28～春季休業前まで）」（2023年1月4日閲覧）https://www.mext.go.jp/a_menu/coronavirus/mext_00006.html
- 3) 文部科学省「GIGAスクール構想について」（2023年1月4日閲覧）https://www.mext.go.jp/a_menu/other/index_0001111.htm

謝 辞

インタビュー調査にご協力いただいた8校の先生方には厚く御礼申し上げます。またインタビュー調査の実施に際しては、豊岡市こども教育課川島様およびコウノトリ共生課戸田様にご協力いただきました。併せて厚く御礼申し上げます。そして、大正大学の高橋正弘先生には環境教育の分野からのアドバイスおよび調査の過程で大変お世話になりました。まことにありがとうございました。

摘 要

兵庫県豊岡市では、小学校3年生から中学校3年生まで「ふるさと教育」が実施され、小学校3年生と5年生ではコウノトリ学習が取り組まれている。筆者は2017年度から2019年度まで小学校5年生のコウノトリ学習の実施状況を調査してきた経緯があり、ゲストティーチャーの講話や副読本を用いた調べ学習、校外学習を活かして学習に取り組んでいることを確認していた。一方で2020年初頭から続く新型コロナウイルス（COVID-19）の影響は学校教育にも及んでおり、コウノトリ学習についても何らかの影響が出ていると考え、2022年8月に8校の教員を対象に電話やオンラインミーティングツール（zoom）を用いたインタビュー調査を行った。

